

NO 30

【2】〔英文解釈〕《東京大》

イシが音楽にもちょっとした造詣があることはたぶんあまり知られていない。彼にインタビューをしたとき、もうその数年も前から彼を知っていたにもかかわらず、私は本当にただぼんやりとそのことに気づいていたにすぎなかった。これは、(1)彼がいかに自分のことを多くは語らないかを表す良い例だ。イシはピアノとギターを弾き、どちらもうまい。彼が実際に今何本のギターを持っているのか知らないが、その数が2桁だとしても私は驚かないだろう。彼の奥さんのローナは歌も歌うし演奏もする。お嬢さんもそうだ。イングリッド家では、音楽を楽しむタベというのは決してまれなものではない。

悔いの少ない私の人生で悔やまれることのひとつは、私にちゃんとした音楽の素養がまったくないということだ。音楽教育を受けたこともないし、それが可能か、あるいは期待できたであろう「音楽のある家庭」といった家の出でもない。むしろずっと、音楽とは自分とは違う「音楽的な」人たちのするものだとして単純に思い込んでいた。(2)一方で、たぶん本を読まずに育った非常に多くの人たちならば、物を書くというのは自分とは違った「物書きらしい」人たちがすることだと感じているのだろうが、私の場合はそう感じたことは一度もない。

しかし、物を書くことと音楽とのこのような対比は奇妙なものである。というのも、私がますます感じるようになってきているのは、物を書くということに関する私の直感的な部分の多くは、実際音楽的なものなのということだからだ。そして、物を書くことと音楽とは、根っここのところではそれほど遠く離れていないのだと思っている。タイミング、テンポ、流れ、緊張と弛緩、主題の反復といった、語りの基本的な要素は、音楽の基本的要素でもある。(3)リズムがなかったら文章を書くことなどできるだろうか、つまり、物語の大枠を形作る大きなリズムや、パラグラフを形成する小さなリズムがなかったとしたら。

【3】〔英作文〕《京都大》

(A) As I live, surrounded by concrete buildings, in a city that is built on the principle of functionalism and apparently looks lifeless, I think there have been much fewer occasions when I realize a small change in the seasons by listening to the songs of birds and insects, and looking at plants and trees whose names I do not know. It is understandable that there has been a recent increase in the number of people who have decided to move into the country in order to have a more relaxed life and to enrich their only precious life.

(B) As I live in an artificial city that gives the highest priority to functionalism and is surrounded by concrete buildings, I think it is less often that I can sense the slight change in seasons by listening to the songs of birds and the sound of insects or taking a look at vegetation whose names I do not know. It is reasonable for an increasing number of people to decide to move into the country these days, hoping to feel more relaxed and to make their precious one-time life more rich and pleasant.

【3】〔英文解釈〕《京都大》

社会は共通理解の上に打ち立てられていると思われている。世間的に意見が一致したこの見解を社会が代々維持できる唯一の方法は、人々をまとめあげている最も基本的な思想と理念を親から子へ伝えるというものである。そうすることにより、社会は自らを生かしておけるだけでなく、長期にわたって繁栄することもできるのだ。これは何らかの漠然とした主義や妥協案に対して、単に知性を用いて同意することを超えるものである。それは人々の心に深く抱かれ共有されており、世の中のありさまを表しているだけでなく、世の中がどうあるべきかを表したものである。(1)そうした理解はその基盤となる価値観に依存しており、そこでは幼児期の初期体験が、子供の社会意識の形成に最も重要である。それゆえ、道徳観念や、採り入れる実際の価値観に親が関心をもつことが不可欠なのだ。このことは、生まれてすぐの数週間あるいは数カ月間に教えられた教訓が最も重要だということを意味している。その後、身につく価値観のすべては、成熟過程にある精神によってすでに身につけている価値観を基礎としなければならないからだ。いったん価値観の基盤が据えられると、それは死ぬまで変わらず、教わった価値観は永久に大人の理解力の一部となるのだ。

道徳観念を教えて定着させるときには、理屈や理論を利用することができるので、子供への道徳教育は気遣う親の側が善悪を分かりやすく示して行わねばならない。そのような確固としてわかりやすい指導をしないとすれば、親としての、そして社会的な責任を放棄することになるだろう。子供が自主的に判断できるようになった後ですら、子供の道徳観念の発達と社会の福利に配慮して、教育を続けねばならな

い。あらゆる状況で権威に対する全面的な協力が望ましいということではない。地域社会の利益が危うくなっているいくつかの状況においては、権威を完全に受け入れることが十二分に役立つということなのだ。^②たとえば、砂漠地域のような場所にある中央政府が用いている原則を考えてみよう。そこでは、水源がある土地そのものを所有しようとも、個人がその天然の水源を独占することは許されない。この意味での全面的な協力が、乏しい水資源をめぐって必ず生じる争いを防ぐのだ。

伝統と風俗習慣は、すべて同じ主義に基づいたやり方で教えねばならない。それは密接な協力の必要性という概念を強化するためだけでなく、これらの信念は、全住民が共有する理解において必要不可欠な部分であり、ゆえにすべての市民が身につけねばならないからでもある。そうすることにより、子供たちは全住民が共有する理解の背後にある知恵をより大きく認識しながら育ち、そのような信念の背後にある根拠を判断する自分の能力を疑うことのできるほどの謙虚さを身につける。^③親がわが子に地域社会の伝統を教えることを怠れば、その子供は大人になっても結果的に、一部で望まれるほどには協力的な市民にならないかもしれず、むしろ陸に上がった魚のような場違いな人間になるだろう。つまり、よくも悪くも社会がその基盤としている、万人共有の世界観からみると、異質で、もしかすると相いれない見解をもった人物になるのだ。そのような人間が十分な数に達すると、地域社会の絆は修復できないほど弱まり、網の目のように複雑にからみ合った人間関係は分断するかもしれない。産業が発達し個人の権利を手厚く保護する国で、現在、個人の自由と公益への配慮のバランスを求めている人がいるのは、ことによるとこれが理由なのかもしれない。
